

開催報告

研究部門「イメージ文化史」主催 2019 年度 ワークショップ
「マンガの体験、メディアの体験」第3回 マンガと幻灯・アニメーション

日時 2019 年 4 月 20 日（土） 13:00～17:30

場所 早稲田大学戸山キャンパス 36 号館 6 階 682 教室

<第Ⅰ部> 13:00～

鷺谷花（大阪国際児童文学振興財団特別専門員）

1940 年代「幻灯画」にみる「漫画家の職域」としてのフィルム／スクリーン

◆幻灯上映あり（協力：早稲田大学演劇博物館）

土居伸彰（ニューディアー代表／新千歳空港国際アニメーション映画祭フェスティバル・ディレクター）

そこになにかがあることを示す描線 ——マンガとアニメーションのオブジェクト性

<第Ⅱ部> 15:45～

細馬宏通（早稲田大学教授）

マンガのコマ連鎖はいかに映像化されうるか

研究部門「イメージ文化史」にて昨年度より継続して開催されているワークショップ「マンガの体験、メディアの体験」第3回が 2019 年 4 月 20 日 13 時より、早稲田大学戸山キャンパス 33 号館 682 教室にて、多数の参加者を迎えて開催された。コーディネイターの鈴木雅雄教授（文学学術院）と、マンガ・アニメ評論で知られる中田健太郎氏（日本大学ほか非常勤講師）による挨拶と講師紹介のあと、休憩を挟んで 3 人の登壇者が発表をおこなった。

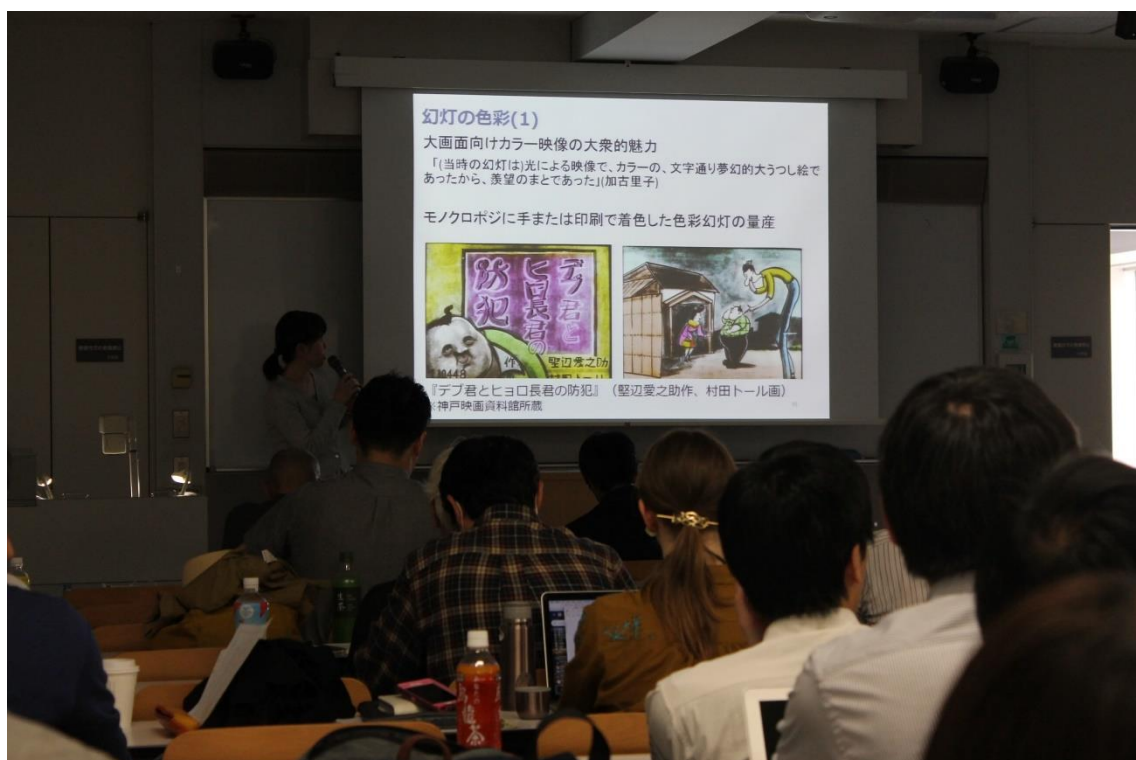
最初に登壇した鷺谷花氏（大阪国際児童文学振興財団特別専門員）はまず、本学演劇博物館所蔵の幻灯フィルムを用いて、1948 年ごろ制作されたとみられる長谷川町子『サザエさん』のカラー幻灯作品『サザエさんのにちよう日』および『サザエさんのしくじり日記』の 2 本を自ら弁士をつとめ、上映した。色鮮やかな幻灯に加え、登場人物ごとに声色を使い分けて弁士役をつとめた鷺谷氏の上映は、専門の研究者はもちろん、学部学生やさらに年少の参加者も含め、幻灯という普段あまり接することのない古いメディアが有していた効果を実感させて余りあるもので、大きなインパクトを残す体験となった。

さらに鷺谷氏は幻灯の歴史について、とりわけ日本における受容史のなかでも大正期に映画が普及して以降の受容、すなわち教育目的を中心とする昭和期——特に戦中から戦後——の日本における幻灯の（大日本帝国政府／占領軍による）国策的活用に焦点を当てな

がら、時代に起因する配給資材の問題なども含め、豊富な情報を提供した。

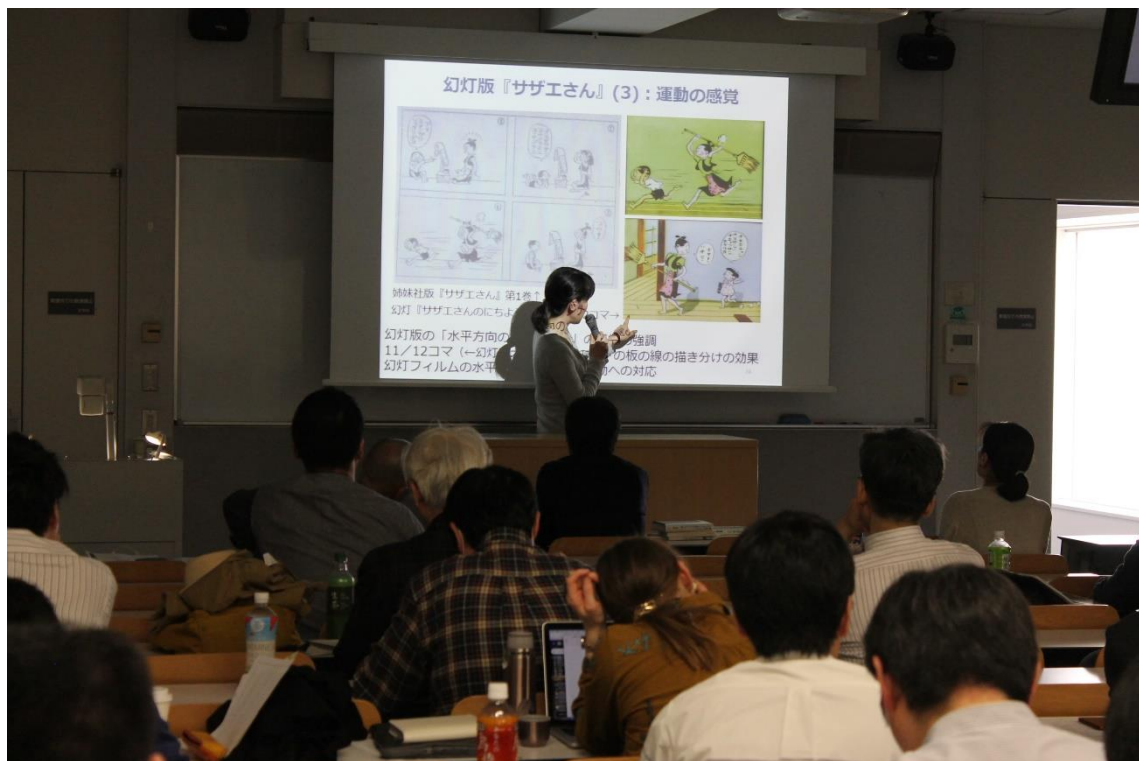


(鷺谷氏による『サザエさん』幻灯上映の様子)



(幻灯は映画より早くカラーでの上映が可能なメディアであった)

そのうえで、戦後に民主主義や普通選挙などの教育のため作成された幻灯に起用された新漫画派集団の作家たちによる幻灯作品や、長谷川町子作品でも今回上映された幻灯と漫画版の単行本などを比較して、幻灯版『サザエさん』が、当時の映画ともマンガとも異なる幻灯の「大画面のカラー映像」「フィルム送りの向きが縦ではなく横である」といったメディアがもつ特殊性に対して、かなり意識的に描かれていることが述べられた。マンガ版に比して詳細な屋内描写が可能になったことから、幻灯版での「磯野家の生活水準の向上」が見て取れること、登場人物の移動がフィルムの送られる横方向と一致していることなど、様々な具体例が挙げられた。この発表に対しては、特に幻灯機のメディアとしての特性など、発表者に対して質問が相次いだ。



(原作漫画と幻灯版の『サザエさん』について詳細な比較がなされた)

続く土居伸彰氏（ニューディアー代表／新千歳空港国際アニメーション映画祭フェスティバル・ディレクター）の発表は、博士論文をまとめた『個人的なハーモニー ノルシュテインと現代アニメーション論』（2016年）と、それに続く『21世紀のアニメーションがわかる本』（2017年）の二つの著書の要約から始まり、土居氏の議論のキーワードであった「原形質性」概念を中心に、国内外のさまざまなアニメーション作品を上映しながら議論が展開された。そこからさらに、先の二著では扱いきれなかった問題として、描線をベースとして作品世界と見る者との関係性のなかで意味を産出し続ける「原形質性」が平面アニメーションの原理であったのに対して、人形の描写や2Dと3Dの共存なども含めた広義

の“立体アニメーション”にあられる、意味に回収しきれないオブジェ的な何ものかを「非原形質的なもの」と捉え、山田尚子『リズと青い鳥』（2018年）やウェス・アンダーソン『犬ヶ島』（2018年）が俎上にあげられた。



（具体的なアニメーションを上映しながら議論を進める土居氏）



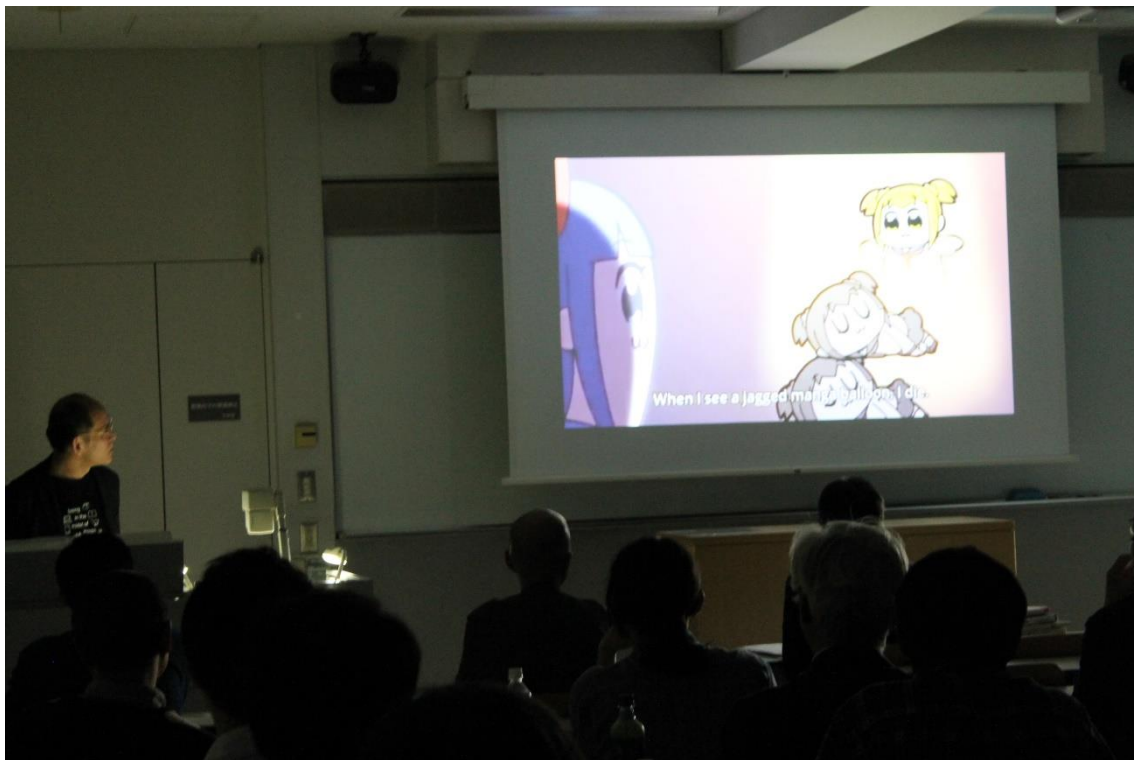
そのうえで土居氏はオブジェ的＝「非原形質的」なアニメーションの在り方として、「ただそこにあること」、ある種の描線が示す「なにかがある」ことを感じてしまう違和感の質に着目しながら、アニメーションとマンガの両方の分野にまたがって活動する3人の若手作家として、アニメーション作品『パラダイス』（2014年）やマンガ作品『FANTASTIC WORLD』（2014年～連載）のひらのりょう、ミュージックビデオ作品『宇宙ネコ子とラブリーサマーちゃん「日々のあわ」』（2014年）やマンガ作品『セッちゃん』（2018年）の大島智子、アニメーション作品『Airy Me』（2013年）やマンガ作品『甘木唯子のツノと愛』（2010-2017年）の久野遥子らを紹介した。

休憩を挟んで3人目に登壇した、4月より本学教授に着任された細馬宏通氏（文学学術院教授）は、2015年5月のワークショップでの発表内容を振り返りつつ、フキダシ内のテキストとキャラクターの身体動作に着目して、マンガ内での時間経過の問題を、19世紀フランスから現代日本まで幅広いマンガ表現を参照しながら論を展開した。



（1コマの内に描かれていなくとも、運動が隠されていることがある）

細馬氏はさらにマンガ独特の時間表現を、作品がアニメーション化される際に、作家を中心とするスタッフや、時には声優たちの演技も含め、いかにしてアニメーションという別のメディアに翻訳したか、という問題を扱った。作品内の情報を詳細に読み解くことで、この史代『この世界の片隅に』、大川ぶくぶ『ポプテピピック』といった近年の話題作を例に、マンガにおける時間表現と、アニメーションにおける「翻訳」の試みが示された。



(細馬氏の発表では『ポプテピピック』などの時間表現も検討された)

発表後は討議に入り、視覚文化研究の石岡良治氏（文学学院准教授）やマンガ評論の夏目房之介氏（学習院大学）ら多くの参加者の質疑が寄せられ、活発に議論が交わされた。





(会場の質疑を受けて活発な議論を展開する 3 人の登壇者)



(質疑に立つ本学の石岡良治准教授)

報告・写真：吉田隼人（早稲田大学文学学術院助手）